

さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題を普段着のまま紹介するシリーズ



2024年3月6日(水)、前夜からの雪模様の寒い中、玉村高等学校を訪ねました。

玉村高等学校は創立 101 年の歴史を持つ県内有数の伝統校で、これまでの卒業生は 9,900 名を超え、県内外で幅広く活躍しています。校歌の中に「璞玉（あらたま＝まだ磨かれていない玉）の潜む光を 磨き出でん その名の如く」とありますが、まさにその精神がこれまでの教育活動を貫いています。（歌詞：「玉村高校百年史」参照）

現在は 1 学年 2 学級ですが、むしろその小さな規模を生かして、行き届いたきめ細かな指導で一人ひとりが育っている様子的一端を取材しました。

国語(言語文化)の授業の中で

今回の取材のきっかけは、玉村高校の大津教頭先生が校内向けに出す「日本語指導だより」でした。そこで、まず日本語学習支援の先生が入っての授業を見学しました。授業は 6 時間目、1 年生国語(言語文化)、設楽経康先生のご指導です。

今日の学習テーマはまず「情報を吟味しながら読もう」。先生が二つの絵を示して、それぞれの絵には違う見方があることから、情報にはいろんな見方があり、よく吟味して読むことが大切だとまとめました。

「さて、今日の主題は次の『自分の考えを深めながら読もう』です。新聞の記事を使いますが、みんな新聞読んでる？そうか、新聞よりスマホだね。でも、新聞の投書欄は読み易くていい勉強になりますよ。これ

から読んでもらうテーマは、ボランティアについて。みんなボランティアやったことある？そう、結構いるね。これからプリントを配ります。まず、ボランティアをどのような行為ととらえているか、A と B の二つの意見が書いてあります。まとめてみて下さい。」A は、無償で働くことの喜び(児童館のボランティア経験から、ボランティアは無償だという意見)。一方、B は、ボランティアは無償でいいのか(海外では何らかの見返りが普通だという経験から、無償でいいのか？と問うている意見)。

生徒は、それぞれ鉛筆を走らせプリントに記入しています。静かな集中した時間が流れます。(参観者がいるとはいえ、熱心な学習ぶりに感心しちゃいました。)

「では、隣りと組んで答え合わせをしてみてください。」(ここで、やっと生徒同士の動きが



I君の学習に寄り添う崎原先生

出てきました)

「次に、あなたが初めて気づいたことを書いて下さい。」

生徒たちは、また静かに熱心にプリントに記入していきます。

やがて、先生は黒板の真ん中にセットされたスクリーンに二つの意見を要領よくまとめて、映し出しました。もう黒板は、時代遅れ?のようです。

「最後に、二つの意見の一つを選んで、賛成または反対の意見を書いて下さい。」

日本語指導員の崎原恵美先生は、後ろから2番目の席にいるI君の横に着席していて、時々会話しアドバイスしています。I君のプリントの答えは、漢字も含めた日本語で記入されていました。名前の欄だけは、もちろん横文字です。

崎原先生が教えてくれるから助かります！

授業が終わった後、廊下でI君にインタビューしました。彼は、2022年にボリビアから来たということです。

Q「今日の授業はどうでしたか？むずかしかったよね、わかりましたか？」

A「むずかしかったけど、わかりました。50%くらい。」

Q「ちゃんと意見を書いていたよね。崎原先生がいてくれると助かる？」

A「わからない時に、先生に言っちゃって、

先生が教えてくれるから助かります。」

Q「設楽先生が言うことはわかりにくいこともあるの？」

A「はい」

Q「崎原先生が来る前と今とではどう変わりましたか？日本語、上手になりましたか」

A「はい、前より日本語がわかるようになりました」

Q「お友達との話しはどうしているの？」

A「今、部活（サッカー）やってるので、部活の中で友達とたくさん話します。」

Q「友達と話すこと、聞くことは困らない？」

A「はい」

Q「困っていることは？」

A「漢字が書けない。中学の時、小3のところまで習いました。」

やりがいのあるこの仕事を続けたい

日本語指導員の崎原恵美先生から以下のようなコメントをいただきました。

一私は昨年9月から玉村高校で日本語指導員として週1日（2時～5時）勤務しています。伊勢崎の小学校・中学校の日本語支援をしていた時に、この仕事を知って応募しました。それまで小学校では学校生活支援助手として学校からのおたよりを読むお手伝いなどや、日本語教室での指導、また授業のアドバイスをしたりしていました。

高校での仕事は週1日3時間（授業1時間と放課後1時間の指導、記録に1時間）なので、日数が少なくて十分に助けてあげられないのが苦しいところです。今日のI君はボリビアから日本に来てまだ2年ですが、中学校の時は日本語教室で学習しましたが、高校ではみんなと同じなので苦労しています。でも社交的でわからないと聞い

てくるので、助かります。大学に行きたいと言っています。

私はこれからもこの仕事を続けたいと思っています。とてもやりがいを感じるからです。私も5歳から9歳までペルーにいましたので、I君たちとも母国語(スペイン語)で話せる機会もあり、家庭のこととか話してくれたりするので壁がなくなってうれしいです。あまり踏み込まないように、話したくないこともあるだろうから、しつこくは聞かないですが…。(コメント・了)

生徒会のスローガンは チャレンジ！チェンジ！チャンス！



生徒会役員の皆さん

放課後、生徒会役員の皆さんにインタビューをしました。まず、役員になった理由は何ですか？

生徒会長・Mさん「中学校の時に関心はあっても踏み切れなかったのが、高校に入ったらチャレンジしようと思って」

会計監査・Fさん「話をするのが苦手で、話ができるようになりたかったのが」

副会長・Tさん「先生から勧められて」

副会長・Kさん「先生がお菓子をくれるというので。エッ？先生がFみたいなユーモアのある人がいれば面白いじゃん」と

なるほど、みな自分を変えたい、出したいということでしょうか。

生徒会機関誌「玉龍」に生徒総会の校則見直しの記事がありました…。

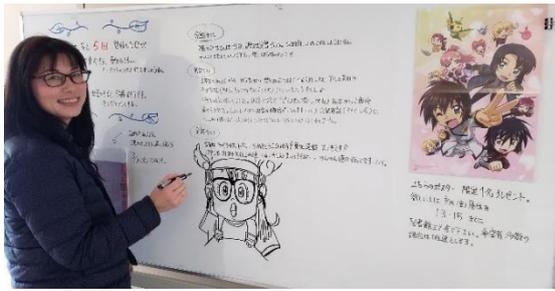
「私たちの要求は、『男子髪型のツーブロックを認めて』『女子の靴下の長さをくるぶしもOKに』『眉毛の手入れを少し認めて』『授業中の水分補給は許可なしで』の4点でした。全校生徒のアンケートから作られたこの要求は、先生方へのプレゼンテーションを経て、校則の見直しが決まりました。」とのこと。これ以外の今年度の変化としては、男女混合の生徒名簿や、女子のストラックス着用者増加などがあるそうです。男女混合名簿は先生方による検討の結果ということですが、確かにこれは性差をなくす観点からも理にかなっています。

最後に、生徒会長のMさんから「一人ひとりの主体性がわかる活動、一人ひとりがはっきり見える活動、輝ける場所、個性を発揮できる場所を創っていきたい」との力強い言葉がありました。すかさず、Kさんの「大人だねえ」とのコメント。役員同士の雰囲気・チームワークも、上々です。

玉高の図書館は明るいんです！

玉村高校の図書館が取り組む活動は、全クラスで行うビブリオバトルや学級文庫の管理など各クラスの図書委員の活躍に拠るところが大きいようです。その活動を牽引している図書館司書の織茂真紀子先生に、図書館の課題と夢についてうかがいました。

「生徒たちの周りに楽しめるものがあふれている今、本を通しての図書館利用は今後難しくなってくる。でも、その良さを見出してつなげるための取り組みは永遠の課題です。学校図書館には専任の司書さんが必要で、私は生徒目線で土俵に降りるということを心がけています。図書館に行きたいから学校に行こうと思ってくれる子がいれば、そういう生徒の居場所、居心地の良い空間を用意したい。生徒にとって校内で



ホワイトボードに向かう織茂先生

一番ハードルが低い場所であり続けたい。」

図書館のホワイトボードには、アニメのキャラや先生の似顔絵、プライベートネタまでいっぱい。織茂先生の図書館にかける想いがあふれ出ています。

特別寄稿 授業を見学して

星野 夏実

(十日町市松之山・地域おこし協力隊員)

卒業して以来、初めて高校の授業を見学した。

今は教壇に立つ先生の言葉を、問いを持って聞くことができるが、学生の頃は中々頭に入ってこなかったことを思い出した。先生という立場の人からしたら、一人ひとりのやる気の問題と思いたいかもしれない。でも普段は使わない熟語が出てきたり、問いを発する間も無かったりすると日本人の生徒でも聞いて理解することが少し遠くなる気がした。外国人の生徒である場合、

それはさらに難しいことになりそうだ。特に「難しさが諦めになった生徒」に支援が必要かもしれない。しかし、様々な家庭環境や、本人の性格への配慮、多くの時間をかけることは今の現場では無理が生じることが予想される。

そのため、支援員に全てを任せるのではなく今まで当たり前だった「授業の進め方」や「配布物の情報」、「声かけの仕方」を先生たちも考える時間が必要だと思った。それは、「外国人」というくくりだけでなく、様々な立場の生徒に必要なことだと思った。

また、支援を受ける側は、支援をする側に左右されてしまうことがあるし、心理的にもお互い様を感じづらい。支援をする側はどこか傲慢な気持ちを持ちやすいため、配慮する必要がある。

これは私が地域おこし協力隊という活動をするにあたって気を付けようと思っていることだ。支援を通して、本当はお互いにケアされている。そしてこのお互いの外側からも私たちは支援とケアの関係が繋がっている。

授業や学校生活を通して、そのような人との関わり方や関係性を知ることができると、自分や他者を責めずに生きやすくなる。そんな気がした。

取材を終えて

当初、大津教頭先生が校内向けに出している「日本語指導だより」をきっかけとした、日本語学習支援に関する玉村高校への訪問でした。しかし、取材を進めるうちに玉村高校が担っている様々な教育課題について考えを深めることができました。日本語を母語としない生徒にとっての「国語」の学習、支援という行為をめぐる相互の思い、皆の要求をまとめて訴えることの意義、身近なところに潜む性差、学校生活での居心地の良さの追求・・・。

世の中では「多様性の尊重」「多文化共生」があちこちで謳われる一方、無意識の差別や分断、深刻な格差が進行し、最後には自己責任で片づける無寛容な風潮が満ちています。

このような世知辛い現代社会にあって、地域の子どもを丁寧に育み、地域に根付いて生きる人が巣立つ学校として、玉村高校の確固たる存在理由を改めて認識できました。

《取材・撮影・文責 瀧口典子・坂田尚之・船橋聖一・星野夏実・大山仁》 《取材協力 神保聡志》